（演題 2）　従来の ^{131}I にかわって ^{125}I による映像を得ようというもので，全く基礎的な検討から取組まれているものである．格子比が高く，焦点距離も長いものがよいとのことであるが，将来はコリメータの改造等が予定されている．臨床的有用性を考慮して ^{131}I より ^{125}I による像を得ようという実際上の要求から行われたもので今後の成果が期待される．

3.　TSH RIA Kit の使用経験

○吉井　弘文　　広田　嘉久
安永　忠正　　上野　助義
片山　健志
（熊大・放）

従来より使用されている TSH の RIA は，assay に 2 日間を要していたが，今回報告する Kit は，凡そ 5 時間で assay できる．

基礎的検討：Intraassay で CV は 3.6～4.9%，Interassay で 4.9～7.3% であった．

回収率は 96.1～100%，稀釈試験では，2.7 μU/ml 以下の場合に悪く 0～77.8% であったが，4 μU/ml 以上のものでは 92.5～102.9% と良好であった．

試薬及び血清量を各々 1/2 量にして，測定したが，いずれの場合も標準曲線，測定値共にほとんど一致した．

臨床的検討：正常値は 2.0～7.1 μU/ml で 4.6±1.5 μU/ml，機能低下症は 23.5 μU/ml 以上，機能亢進症は 6.3 μU/ml 以下であった．HTSH Kit との相関は 0.96 で y=0.8x+2.8 の回帰曲線が得られた．

4.　甲状腺 ^{99m}Tc-Space 簡易測定法としての Neck/Thigh Ratio の検討

○上野　義博　　野口　志郎
村上　信夫　　伊藤　淳一
原尾　基継　　宮原　純徳
野口　秋人
（別府野口病院）

^{99m}Tc の Neck/Thigh Ratio (N/T 比) が甲状腺機能検査として，臨床的に有用である事を第26回日本内分泌西部部会総会，第18回核医学会に発表して来た．そこで今回は，^{99m}Tc の静注後，甲状腺／血液比 (T/B 比)，いわゆる Tc Space (ml) が一定に達する事を利用し，Tc Space と N/T 比の相関を求め検討を行った．

(方法)　T/B 比はまず甲状腺重量，単位重量 (g) 及び単位血中 (ml) の ^{99m}Tc カウントを測定しなければならない．そこでヒト in vivo でその条件を満足する対象として，手術予定のバセドウ氏病18名を選び，術前 N/T 比，術中 T/B 比の測定を行い相関を求めた．T/B 比は well 型，又，N/T 比は standard の Scintillation counter を用い，^{99m}Tc 1 mCi の静注後30分にて行った．

(結果)　相関係数 0.9583 ($p<0.001$) と有意の相関が得られた ($y=0.762x-2.8068$, x: N/T 比, y: T/B 比)．よって Tc Space の測定が N/T 比より可能となる．

5.　脳槽シンチグラフィーの検討

○島袋　国定　　城野　和雄
坂田　博道　　中條　政敬
篠原　慎治
（鹿大・放）

昭和50年より昭和53年末までの期間に89例の脳槽シンチグラフィーを実施し，そのシンチグラフィックパターンを検討すると共に，最終診断および CT の所見と比較検討した．

1)　シンチグラフィックパターンは McCullough らの方法に従い，5 型に分類した．その結

Presented by Medical*Online